Honig Kalzit

HERMES

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｈｏｎｉｇ Ｋａｌｚｉｔ

【Ｎコード】
Ｎ０１０８Ａ

【作者名】
ＨＥＲＭＥＳ

【あらすじ】
組織の一件はどうにか片をつけることができた。そして，平和な日々が戻った。そんな最中，大学入学を目前にした平次と和葉は下宿先を探していた。この物語はそこから始まる。

Prolog

Kavalier liebte seine Prinzessin mit der Zwielicht

Kavalier hatte den Edelstein a

n das Leben der Prinzessin stat

tet

Prinzessin wurde sich angekett

et

Engel leitete die Prinzessin i

n Kettenhemd Edelstein befrel

ite Prinzessin aus den Katte

Ｐｒｏｌｏｇ（後書き）

久々の連載となります。ＣＮＲ異端部門（別名，変わり種部門）担当（自任）の名に恥じないものを書きたいと思います。最近，外国語がＣＮＲで流行っているみたいですので，私も一つ参加してみようと思います。というわけで，題名に始まり，Ｐｒｏｌｏｇ（スペルミスではありません。ちなみに，英語でも，アメリカではこういう綴りも稀にするそうです），次に続く副題まで，英語ではありません。これらは全てドイツ語です。もちろん，最初の５行の詩もドイツ語です。

パッと見だと，意味がよく分からないので，それなりに良さげに見えたりします。英語だと分かりそうな感じですが，ドイツ語だと分からないだろうという安易な考えがあることは否めません（笑）

一応，日本語からドイツ語に起こしています。その日本語詩はＥｐｉｌｏｇでお目にかけようと思います。これを機械翻訳で英語に直しても，まともな文章が出てきませんでした。私の書いた文章が間違っているということはありません（と胸を張って言えるわけもなく……）。翻訳結果を見た感じでは，ドイツ語の語順や語形変化に対応していないようです。

あと，ドイツ語にしようとした理由はもう一つあります。この最

初の詩は
ＫａｖａｌｉｅｒとＰｒｉｎｚｅｓｓｉｎ……つまり，騎士と姫の物語形式になっています。騎士と姫の物語といえば，騎士道物語……といえば，中世ドイツ……というわけで，
ドイツ語にしてみました。
　この詩がどう本編に関わるのかというのは，読んだ後のお楽しみということで。どうせ，Ｐｒｏｌｏｇなんだから，最後にどういう意味か分かってもらえれば言いわけですし。というよりも，最初に分かられてしまうとどうしようもないです。あとがき（というよりは，まえがき）が長くなりましたが，本編へと読み進めてみて下さい。

Tat 1 Beenden und Beginnen

コナンや哀に関わる一連の事件は新一達が高校三年生になった夏に終結した。
コナンは元に戻って再び学校に通い始めた。蘭にも自分の正直な気持ちを全て
打ち明けた。そして，二人は未来へ向けての新たな一歩を踏み出すことになっ
た。再び，離れ離れになることがないように願いつつ……
志保は司法当局との水面下の司法取引で全ての罪を免責された。そして，そ
のまま，博士と一緒に暮らすことになった。
日本政府が改革の一環として提起した欧米諸国に対抗するための学術振興政
策により，科学分野に巨額が税金から捻出された。そして，志保は分子生物学
分野で日本の研究者として研究することを司法取引の条件とされていたことも
あり，新たに最新設備を備えて設立された国立分子生物学研究所の所長に就任
した。
年が明けて春が訪れた。新一は東都大学医学部，蘭は東都大学法学部，平次
と和葉は京都大学法学部に入学した。全てが順調だった。

「なあ，平次，どうやった？」
平次と和葉は通話中だった。
「アカンかったわ。お前の方はどうやった？」
「アタシの方もアカンかったわ。二人共，抽選漏れか……」

平次と和葉は大学の寮の抽選に申し込んだのだ。しかし，その結果は，残念
ながら，抽選漏れということになってしまった。
「そうなると，住むトコを探さなアカンな。そういえば，お前，親戚が京都に
おったんやなかったか？」
「そうなんやけど，親戚の家に下宿ゆうのもちょっとな……まあ，どうしよう
もなくなったら，そうしようと思ってるんやけどな」
「せやったら，明日にでも京都に行かへんか？　今の時期やったら，一刻を争
うやろしな」
「分かったわ」
「明日の朝8時にお前の家にバイクで迎えに行くから，それまでに仕度しとけ
や」
「うん。じゃあ，また，明日な。お休み」
「ああ」
二人は同時に通話を終了させた。

「もうこんな時間か」
平次は腕時計に視線を落とすと1時を指していた。二人はとある寺の境内で
休憩していた。
「ホンマや。アタシ，お弁当を作ってきたから食べへん？　平次の分も作って
きてん」
和葉は満面の笑みで弁当を取り出した。和葉が取り出した三段の重箱には，
和風会席顔負けの豪華絢爛な料理の数々が盛りつけられていた。

「これ，お前が一人で作ったんか？」
「そうや。朝の5時起きやってんから心して食べや」
（驚いたわ。和葉一人でこんなもん作れるなんて……）
料理は京野菜を使ったものが中心だった。味つけは薄味で素材の持ち味を生
かす京風だった。
（そういや，和葉のオカンの家は京都の料亭やってゆうてたな。こんな気の強
い女でも女らしいトコはあるんやな）
平次は自分が気づかなかった和葉の女性らしい一面に感心していた。
「平次，どないした？」
上の空な平次に和葉が声をかけた。
「何でもあらへんわ」
平次は照れ隠しのように黙々と箸を動かし始めた。

「まるたけ……えび……すに……何やったっかな？」
平次達が座っていた場所から少し離れた小石が敷き詰められた中庭に，着物
を着た少女がいた。
「押御池や」
和葉は着物の少女に近寄って続きを教えてやった。
「あんた，手鞠唄をやっとんのか？」
「うん。昨日，お祖母ちゃんに教えてもろてんけど……よく覚えてへんね」
「せやったら，アタシが教えたるわ」
「ホンマに？」
「もちろんや」
「お姉ちゃん，ありがとう」
「最初からゆうで。丸竹夷二，押御池♪　嫁三六角，蛸錦♪　四綾

仏高，松万
五条♪　雪駄ちゃらちゃら，魚の棚♪　六条三哲通り過ぎ♪　七条越えれば八
九条♪　十条東寺で止め刺す♪」
「おい，和葉。嫁三六角やのうて，姉三六角やで。嫁小路通りやのうて，姉小
路通りなんやから」
　座ったまま二人の様子を見ていた平次が口を挟んだ。
「分かっとるわ。アタシが習ったトコのは嫁三六角やってんから，こうなって
まうだけや」
　和葉はこれから訂正するところだったと言わんばかりに反論した。
（せやけど，こいつに手鞠唄を教えた人に感謝せなアカンな。そのおかげで，
オレの初恋の人がこいつやって分かったんやからな）
　平次は自分の初恋の人が和葉だったと判明した時のことを思い出して思わず
鼻で笑っていた。
「そんな，人をおちょっくったように笑わんでもええやんか」
　和葉は自分が普通とは違う手鞠唄を覚えていることを笑われたと思ってむく
れていた。
「お前のことを笑ったんとちゃうわ」
「嘘や。絶対，アタシのことを笑ったやろ？」
「それより，その嬢ちゃんに手鞠唄を教えたりや」
「分かっとるわ」
　和葉は平次への追求を渋々ながら諦め，着物の少女に手鞠唄を教え始めた。
２０分ほどで着物の少女は手鞠唄をほぼマスターしていた。
「お姉ちゃん，ありがとう。アタシ，用があるから家に帰らなアカ

ンね。バイ
バイ」
着物の少女は満面の笑みで手を振りながらその場を後にした。
「気いつけてな」
和葉も満面の笑顔で少女に笑みを返した。
（オレらも大学生なんやな。いつまでも，このままってわけにはいかんな。そ
ろそろ，きっちりとケジメつけなアカンな。当たって砕けろ……やな）
平次は思わず拳を握っていた。
「平次，そんな怖い顔してどないしたん？」
和葉が不思議そうに平次の顔を覗き込んできた。
「何，何でもあらへんわ。そろそろ，行くとするか」
平次は考えを巡らせていた張本人に覗き込まれて慌てて平静を装った。

「今日はこの辺にしとかへんか？」
和葉が切り出した。辺りはすっかり日が暮れていた。
「そうやな。ここで最後にしよう」
二人は目の前の不動産屋へと入って行った。
「今晩は！」
「いらっしゃいませ」
店員が愛想良く二人を出迎えた。二人は店員に自分達の希望条件などを話し
て，適当な物件がないかどうかを尋ねた。
「……１ＤＫか１ＬＤＫを二部屋ですか。生憎，そのような物件は全て塞がっ
ておりまして……」
「そうですか……」
二人は足を棒にして尋ねた先でガックリと肩を落とした。

「せやけど……」
「せやけど？」
二人は思わず身を乗り出した。
「２ＬＤＫでしたら，とてもお値打ちの物件がございまして……もし宜しければ，
そちらをご案内致しますが……」
「う～ん……せやけど，２ＬＤＫやと一人で住むには広すぎるんとちゃうか？」
「……おっちゃん，その物件，１０分だけ取っといてくれへんか？」
平次が唐突に切り出した。
「え？　まあ，１０分でしたら……」
「和葉，ちょっと，来てくれ」
そう言うと，平次は立ち上がって店を後にした。
「ちょっと，平次……」
和葉はつかつかと店を後にした平次の後を慌てて追いかけて行った。

「ちょっと，平次，どこに行く気なん？　いきなり，店を飛び出して……」
二人は神社の境内にいた。そこはひっそりとして，人の気配どころか，子猫
一匹の気配すら感じられなかった。
「和葉……これから，オレがゆうことをよう聞いてくれ」
平次は和葉の双肩に両手を置いて，和葉の顔をじっと見つめた。
「う，うん……」
和葉は意中の相手である平次に今までにない真剣な表情で見つめられて，頬
に紅が挿し，胸が高鳴っていた。
「和葉……さっきの部屋のことなんやけどな」
（なんや，そないことやったんか）

和葉は自分が期待していた言葉とは違っていて残念だった。露骨にやる気のなさそうな表情をしていた。
「和葉，オレは真剣なんや！」
和葉の表情を見て，平次は和葉に真剣な話だと念押しした。
「う，うん。でも，２ＬＤＫなんて一人で住むには広すぎるし，値段も高いやんか。それに，その部屋が二つもあるとは限らへんし」
「それ以外の条件は文句あらへんのやな？」
「うん，まあ……」
和葉は言われるままに返答した。
「せやったら，一人やのうて，二人やったらどうや？　二人やったら，広すぎるゆうこともあらへんし，値段も半分やったらそない高くはないやろ？」
「え？　二人でって……」
和葉は収まりかけていた胸の高鳴りがぶり返してきた。
「オレとお前に決まっとるやろ？」
「アタシと平次が……一緒の部屋で……同棲？」
和葉はいきなり意中の相手から同棲話を持ちかけられてパニック状態だった。
「オレ……お前のことが……好きやから」
平次はついに今まで胸に秘めてきた想いを本人に告げた。
「アタシもや……平次のことが好きや」
二人のシルエットは自然と重なり合っていた。

Ｔａｔ　１　Ｂｅｅｎｄｅｎ　ｕｎｄ　Ｂｅｇｉｎｎｅｎ（後書き）

（あとがき）

今回も，前作（『浪花の姫君』）に引き続き，平×和です。ちなみに，副題
は「終結と開始」という意味です。「Ｔａｔ」は「ａｃｔ」の意味です。副題全体の
読みをカタカナで表すと，「タット・アイン。ベエンデン・ウント・ベギネン」
となります。

いつもは，一作品文を全て書き終えてから（『Ｌｉｔｔｌｅ　Ｇｉｒｌ　Ｂｅｌｉｅｖｅ　ｉｎ　Ｈｅｒ　Ｄｅｔｅｃｔｉｖｅ』は１パートごと），投稿することにしているのですが，今回はまだ
書き終えていません。とはいえ，全体のイメージは頭の中にあるのですが。

けれど，実は自サイトの方でも更新が遅れ気味なので，こちらも遅れ気味に
なるかもしれません。ですので，気長に見守ってやって下さい。

Tat 2 Bespreshung und Resultat

服部邸に平次・和葉と二人の両親の計６名が卓を囲んでいた。
「平次，話ゆうのはどんなことや？　ワシら４人を集めたっちゅうことは重要
な話なんやろ？」
相変わらずの威圧感を持つ平蔵が，半眼の視線で平次を射貫いた。
「ああ。昨日，和葉と京都に行って来て住むトコを探して来た」
「うちから通うにはちぃと遠いしな」
「それに，大学生なんやから，一人暮らしぐらいした方がええと思うわ」
両親達は平次と和葉が家を出ることには賛成の態度を示した。
「そ，それでや……あの……」
平次はなかなか切り出せなかった。
「ちょお，平次，早，ゆわんと……」
平次の隣に座っていた和葉が小声で平次に続きを促した。
「そないことゆうたって，『はいそうですか』ってゆえるような話やないやろ？」
平次も小声で和葉に言い返した。
「そら，そうやけど，ゆわへんわけにはいかへんやろ？　アタシらはお金出し
てもらう身なんやし」
「そないこと分かっとるわ」
平次と和葉の小競り合いは平行線を辿っていた。
「とにかく，平次から話すゆうたんやからな」
「分かったわ」
平次はとうとう観念したらしい。
「あ，あの……住むトコのことなんやけどな」
平次は和葉の父親の顔色を重点的に伺っていた。昔から，娘が他

の男とどう
こうという手の話に一番うるさいのは，父親と相場が決まっているからである。
「昨日，見つけてきたんや」
「そうゆうたな」
「それでなんやけどな……オレ達，同じ部屋を借りることにしたんや」
平次の言葉に両親達は目を点にしてしまった。あまりにも唐突に衝撃的な宣
言をされたのだから仕方ない。
「同じ部屋を借りる？」
「一緒に住む？」
「同棲？」
両親達はそれぞれ断片的な言葉で平次の言葉を整理していた。
「オレらは本気なんや！」
平次は混乱収集に奔走している両親達に再宣言した。
「アタシらで決めたんや。せやから……アタシは平次と一緒に住む！」
和葉も身を乗り出して両親達に宣言した。
両親達の混乱は一行に収まる気配を見せなかった。ようやく一段落すると，
平次と和葉を除いた両親達４人による緊急会議が開かれることになった。外に
出された平次と和葉は平次の部屋に移動した。
「一体どうなるんやろな？」
和葉はベッドの上で腕を頭の後ろに組み，足を組みながら寝転がっていた。
「そうやな……」
平次は椅子に馬乗りになって和葉の方を見ていた。
「どうでもええけど，どないして，お前がオレのベッドに寝転がっ

てんね？」
「別に，ええやん。減るもんやないんやし。このベッド，スプリングが効いて
て気持ちええねん」
和葉は悪びれもせずに言ってのけた。
「せやけど，この女，度胸が据わっとるとゆうか，何とゆうか……」
平次は遠い目でぶつぶつと呟いていた。
「平次，どうかしたん？」
和葉には平次の考えていることが伝わっていなかった。
「何やかんやゆうたって，ここはオレの部屋やで。それなのに，お前はそんな
無防備な格好で転がりよったからに……」
「ふふふ……あはははは……」
和葉は文字通り腹を抱えて笑い転げていた。
「何，何がおかしいねん？」
平次は適当に茶化されたようで面白くなかった。
「だって，平次が真面目な顔して変なことゆうから，おかしゅうて，おかしゅ
うて……あはははは……笑いすぎてお腹が……」
和葉はまだ笑い転げていた。
「はあ……はあ……」
和葉は笑いすぎて呼吸困難一歩手前といった状態になっていた。
「そら，アタシかて，男の部屋で無防備な格好で寝転がるんは，抵抗あるけど
平次の部屋やからな。そんな心配あらへんって」
未だに和葉は笑い転げていた時の表情のままだった。
「へえ……さよけ」
平次はおもむろに椅子から立ち上がると行動を起こした。
「平，平次？」
和葉は動揺を隠し切れなかった。寝転がっている状態で平次に両

肩を抑えら
れていたのだ。人体の構造上，両肩を押さえられると上半身の行動
は大きく制
せられてしまう。
「確かに，お前のゆう通りやろな。でも，それは昨日までの話や。
お前がオレ
のことを好きやって分かったんやからな」
和葉は狼に襲われる赤ずきん状態だった。
「で，でも……何ちゅうか……あのな……下にはお母ちゃん達もお
るんやし……」
和葉は拒絶半分歓迎半分といった微妙な表情をしていた。
「せ，せやけど……平次がどうしてもってゆうんやったら……ええ
よ」
和葉は平次の理性を麻痺させてしまうような可愛らしい表情をし
ていた。
「平次，和……葉ちゃん……」
平次の母親が平次の部屋に入って来た。目の前の光景に固まって
しまった。
平次がベッドに寝転がる和葉の両肩を制しているのである。しかも，
ドアの正
面にベッドが横向きに配置されていたので，平次と和葉の様子が丸
見えだった。
「違うんやって！」
平次は和葉の両肩から手を離し，和葉も瞬時に起き上がった。そ
して，二人
で懸命に否定していた。
「アタシらは邪魔やったようやな」
そこには，和葉の母親も一緒にいた。
「せやな。後は若い二人に任せた方がええな」
二人の母親達は多少の動揺は見せたがすぐに立ち直っていた。そ

れどころか，
「二人がしようとしていた」と彼女達が考えていたことを促しさえした。
こういうことに関しては，母親はどっしりと構えていられるというのが相場
である。逆に，父親はそうはいかないというのもまた相場である。
「お母ちゃんもおばちゃんも変な誤解せんといてや」
「そうや。オレらは別に何もしてへん」
平次と和葉は口々に潔白を証明する言葉を並べた。
「邪魔者はこれでお暇するわ」
「せやけど，するべきことはちゃんとせなアカンよ。子供やないんやからそう
いうことするんは，当人同士の問題やから口出しせえへんけど，立場っちゅう
もんは考えなアカンよ」
「だから，勝手に話を進めんといてや！」
「和葉ちゃん，分かってるから。至らない息子やけど宜しう頼むわ。平次，間
違いだけは犯さんようにな」
平次達の言い分を右から左に軽く聞き流した母親達は，言いたいことを言う
と速やかにと部屋を後にした。
「……」
二人は呆然としていた。
「まったく，近頃のオバハンときたら……」
平次は母親達のパワーに圧倒されていた。
「大体，あんたのせいやで！」
和葉は平次に怒鳴った。
「何やと！」
平次も平次で和葉に怒鳴り返した。

「あんたが厭らしいこと考えるからこんなことになったんやないか」
「よく言いよるわ。お前だって，その気やったくせに！」
「じゃかしい！」
和葉はどこからともなく持ち出したハリセンで平次の後頭部を強打した。
「何するんや！」
「純情な乙女の繊細な心を弄びよったからに！」
「じゃかしいわ！」
今度は平次が和葉からハリセンを奪い取って後頭部を強打した。
「誰が純情な乙女や！」
「乙女をど突くなんて最低や！」
再び和葉がハリセンを奪い取り，今度は平次の顔面にフルスイングの一撃を加えた。
「顔面をど突く奴があるか！」
さすがに，紙製のハリセンといえでも，顔面へのフルスイングは強烈だった。
「じゃかしい！　全部，あんたが悪いやから当然の報いや！」
「このアマ，もう勘弁ならへん！」
平次は和葉に取っ組みかかろうとした。
「ふん」
しかし，和葉は慌てずに取っ組みかかってくる平次を捌いた。平次が突進してくる力を利用して逆に投げ飛ばした。合気道の達人である和葉ならではの対処である。
「力だけで勝てるなんて思うとったら大間違いや」
和葉は勝ち誇るように吐き捨てた。
「さすが，和葉ちゃんは強いわ。それに引き換え，平次はまだまだ

修行が足ら
へんな」
「まったく，どこで，どう間違ってんやろか」
二人の母親達はこっそりと二人の様子を見ていた。
「まあ，喧嘩するほど仲が好いってゆうし，後は当人同士で……」
「そうやな。アタシらはこの辺で……」
二人の母親達は平次と和葉の壮絶な夫婦喧嘩を止めようともせず
にその場を
後にした。

Tat 2 Besprechung und Resultat（後書き）

（あとがき）

意味：「協議と結果」
読み：タット・ツヴァイ。ベシュプレッヒュング・ウント・リザルタート

今回の話は，平次と和葉が両親達に同棲を切り出す話です。今更ながら，こ
の話の二人は大胆極まりないです。いや，開き直っているのかもしれませんが。
それはともかくとして，遅々とした執筆ぶりですが，気長にお待ち頂ければ
と思います。

P．S．　前回のドイツ語の「1」の読み方は，「アイン」ではなく「アインス」です。

Tat 3 Schwangerschaft und Heirat

平次と和葉は当初の予定通り同棲することになった。それは両親達にも承認された。ただし，それにあたってはいくつかの条件を出された。ともあれ，こうして二人の同棲生活は幕を開けた。

二人の生活は順調そのものだった。こうして，月日は流れ，年の瀬も最後を迎えようとした１２月２４日のことである。キリスト教徒にとっては，イエス・キリストの生誕日であるこの日は，最大の宗教的イベントの日である。しかし，日本では「クリスマス・イブ」と称され，恋人達が心時めかせる日である。（キリスト教徒でなければ）一般の日本人の間においては，宗教的要素はほとんど見られない。皆無と言っても良いほどである。

既に冬休みということもあって暇ではあった。そして，平次と和葉は大学で知り合った仲の良い友人達とのコンパに参加していた。しかし，二人は二次会へと連れ立つ友人達を尻目に帰宅した。当然，二人だけで聖夜をすごすためである。

「平次～♪」

和葉は部屋に上がるなり平次に抱きついてきた。

「おい，和葉，お前，酔っとるんか？」

（そういや，こいつ，仰山飲んどったな。強くもないんやから注意しとけゆうたのに）

平次は困惑しながらも抱きついてきた和葉を受け止めた。

「酔ってへんよ♪」
和葉は真っ赤な顔で怪しい呂律で言った。そんな様子で否定されても説得力は皆無だったことは想像に難くない。
「しっかりせえ」
「しっかりしとるよ♪」
言葉とは裏腹に，和葉はグッタリと力が抜けた状態で，平次が支えていなかったらその場に崩れ落ちるようなありさまだった。
「しゃあないな」
平次は溜め息をついた。それから，和葉をお姫様抱っこして，和葉の寝室に運ぶことにした。
「お姫様みたいや♪」
すっかりできあがってしまっている和葉は黄色い叫び声を上げて喜んでいた。
「……ホンマに世話の焼けるやっちゃのう」
平次は，怪しい呂律で判別不能な何かを嬉しそうに言っていた和葉をベッドに降ろした。
「なあ，平次♪」
「ん？」
「愛してる♪」
和葉は，素面の彼女ではとても言えないような台詞を平然と言ってのけた。
「ああ」
平次はさほど驚いていなかった。
「平次♪」
和葉が平次に抱きついてきて，そのままベッドに倒れ込んだ。
（オレの負けや……）
平次は，今日も和葉の魅力（素面でないので本人がどういうつも

りなのかは不明だが）
に負けた。

それから，三ヶ月が経過した。クリスマス・イブの晩以降には思い当たる節はなかった。
それというのも，年末年始は帰省やら何やらで慌ただしく過ぎ，年が明けても大学の定期
試験があって，忙しさは揺るがなかったからだ。そんな忙しさが一段落したある日のこと
である。
（……どないしよう。ホンマやったら，喜んでええことなんやろけど……）
和葉は自分の腹部に優しく手を当てた。
（平次にゆうたら，何てゆうんやろ？　ううん，話さなアカン。アタシだけの問題やない
んやから）
和葉は，意を決して，平次に真実を告げることにした。

《なあ，工藤，聞いてくれ！》
平次は和葉から重大な話を切り出された翌日に新一に電話していた。
「ああ？　こんな朝っぱらから何だってんだ？」
新一はすこぶる不機嫌だった。寝癖で凄まじいことになっている髪の毛を撫でつけてい
た。
《工藤，もしもやぞ。もしも，お前が蘭さんに……妊娠したゆわれたらどないする？》
「へ？　蘭が妊娠？」
寝惚け眼の新一は事情が飲み込めていなかった。
「だから……」

「……ああ，もしかして，和葉さんが……そういうことか？」
ようやく，新一は平次の言わんとしているところを察した。
《……昨日，そうゆうとった》
「それ，本当なのか？」
《ああ。病院で調べてもらったってゆうとったから間違いないはずや》
「まったく……何を考えてやがんだ？　まあ，お前のことだ，そんなバカな真似はしてねーだろうけど。こればかりはどうしようもねーか」
《……》
「……ったく。オレ達みたいな状況で，子供ができて苦労するのは，オレ達じゃなくて，
蘭や和葉さんなんだぞ。オレ達は子供ができたってだけですむけど，
蘭達は大きな腹を抱
えなくちゃならなくなるんだからな」
《……》
平次には反論の仕様がなかった。新一の言うことは全くもって正論だったのだから。
「蘭の両親は，それでかなり苦労したらしいからな」
蘭の両親……つまり，小五郎と英理は２０歳の時に，大学在学中に蘭を産んでいる。
《……それで，困っとんね。和葉と同棲する時に，オレのオカン達や和葉のオカン達にも
就職するまでは，子供は作るなってゆわれてたんや。それが，同棲の条件やったし》
「それより，お前達の気持ちはどうなんだよ？　産むつもりなのか？　それとも……」
《オレも和葉も産みたいと思っとる。オレらの子供を殺すことなんてできへんしな。せやけど……》

「だったら，答えは出てるだろ？　お前達が産みたいって思ってんだったら，産むべきなんじゃねーのか？　たとえ，親父さん達が反対したってな。少なくとも，オレならそうするぜ」
《……そうか》
「でも，親父さん達にはきちんと話すべきだろうな。まだ大学生なんだから，子供を養う当てなんてねーだろ？　大学を辞めて働くって手もあるだろうけど，生まれてくる子供の将来のためにも勧められねーな」
《ああ》
「親父さん達だって，鬼じゃねーんだから，話せば分かってくれるさ。初孫が可愛くねーはずがねーだろうしな」
《……和葉のオトンに何てゆわれるか恐ろしいけどな》
「確かに，そんな気もするけどな」
新一は失笑を漏らした。
《とにかく，助かったわ。じゃあ，またな》
「ああ。取り敢えず，おめでとうって言ってくぜ。それと，和葉さんと生まれてくる子供を絶対に幸せにしてやれよ。あと，妊娠中の和葉さんとお腹の子供を守ってやれるのは，他の誰かじゃなくて，お前自身だってことを忘れるなよ」
《ああ，おおきにな。じゃあ，またな》
平次は新一との通話を終えた。
《そう……和葉ちゃん，妊娠したんだ。おめでとう》
和葉は和葉で蘭に電話していた。
「おめでたいんやろけど……」

和葉は手放しで喜べる事態でないことを痛感していた。
《だって，服部君との子供なんでしょ？》
「うん。平次としか思い当たる節もあらへんし……」
《和葉ちゃんは産みたいんでしょ？》
「うん……平次との子供やから絶対に中絶なんてしたない」
《そうだね。私も産むべきだと思うよ。実は，その話は新一から聞いてるんだ》
「え？」
《服部君が新一に相談してきたんだって。和葉ちゃんが私に相談してくれたようにね。新一が服部君によく言って聞かせたみたいだから，和葉ちゃんは心配しなくて良いよ。
だから，和葉ちゃんは遠慮なく服部君に頼っちゃいなよ。今の和葉ちゃんの体は，和葉ちゃん一人だけのものじゃないんだから》
「うん」
《ご両親には二人でちゃんと話すべきだと思うよ。和葉ちゃん達が本気だって分かれば，分かってくれるはずだよ》
「分かったわ。平次ともよく話してみるわ。それから，お母ちゃん達にもな」
《うん。じゃあ，また，何かあったら電話してね。私で乗れる相談だったらいくらでも乗るから》
蘭は静かに通話を終了させた携帯電話を傍にあるテーブルの上に置いた。
「今の話，聞いてたわよね？」
蘭はソファの方を向いて言った。そこには新一の姿があった。
「ああ，服部の話と符合してるな」

新一は組んだ足の上で，読んでいた本をパタリと閉じた。
「まあ，服部の奴も，ああ見えて，やる時はやる奴だ。何より，和葉さんにとって，一番
頼りがいのある奴なんだからな。悪いようにはならないさ」
「そうだよね。和葉ちゃんだって，しっかりしてるんだから」
「ああ。まあ，色々と苦労は多いだろうけどな」
新一はテーブルに積んであった別の本に手を伸ばした。
「それにしても，新一も大変そうだよね」
蘭はテーブルに詰まれた本をしみじみと見ながら言った。
「あのな，大変そうじゃなくて，本当に大変なんだよ。これも，皆，あいつのせいさ」
新一は不満げに漏らした。
「あいつって？」
「宮野だよ」
「志保さん？」
「ああ。あいつ，非常勤でうちの大学に来てるんだよ。何でも，アメリカの大学にいた時
の知り合いに頼まれたらしい」
国立分子生物学研究所所長を務める志保は，非常勤講師として東都大学で教鞭を取って
いた。
「へえ」
「二年のあいつが担当する薬理学の講義を受ける場合は，そこにあるような本を理解して
いることを前提にするとか言いやがったんだ。しかも，あいつ，基本的に講義は英語でや
るし」
「これ，全部，英語じゃないのよ」
蘭はテーブルに置いてあった本を一冊手にとって見た。
「ああ。英語で講義するぐらいだからな。二年の薬理学は，他の教

授の講義もあるんだけ
ど，先輩達の評判はかなり悪いからな。実際に，去年，潜ってみた
んだけど，最低だった
ぜ。ノートをただ棒読みしてるだけだったからな。
　噂じゃ，どっかの本をノートに写して，それを読み上げてるだけ
って話らしい。それで，
まさかと思って確かめたんだけど，マジで本当だったから驚いたぜ。
だから，渾名は学費
泥棒っていうらしいぜ」
「それは酷いね」
「ああ。でも，単位が甘いから受講者登録者数は多いらしいけどな。
医学部だと，他の科
目も厳しいのが多いからな。まあ，仕方ねーっちゃ，仕方ねーけ
どな。
　それに引き換え，宮野の講義は理路整然として分かりやすいぜ。
課題が半端じゃねーけ
どな。まあ，勉強になるのは間違いねーけどさ」
「やっぱり，医学部って大変なんだね」
「お前だって，大変じゃねーかよ。お袋さんの事務所でインターン
やってんだろ？」
　蘭は英理の法律事務所でインターンをやっていた。給料も貰える
ので，アルバイト的な
意味合いもあった。
　細やかな気配りができ，雑用から事務作業やデータ入力作業まで
テキパキとこなす彼女
は，かなり重宝されていた。人柄も良いので，職場での評判も上々
だった。
「うん。やっぱり，早いうちから法律業務に慣れてた方が，後々た
めになるってお母さん
にも勧められているから」

蘭は母親と同じ弁護士を目指していた。

平次と和葉は，新一や蘭に勧められた通りに，両親達に和葉の妊娠を報告した。そして，生まれてくる子供を二人で育てるという意思を伝えた。両親達は二人に色々と説いてはみたが，二人の決心は固かった。両親達も二人の決意が固いことを確認したうえで，二人への援助を約束した。

また，平次と和葉は生まれてくる子供のために，正式に籍を入れることにした。父親と母親の戸籍がバラバラだと何かと面倒だからだ。もちろん，それだけが理由ではないのだが。二人は未成年だったために両親の承諾が必要だったが，それも快諾された。

「Heiji，do you take Kazuha to be your wedded wife，to live together in marriage？ Do you promise to love her，comfort her，honor and keep her？ For better or worse，for richer or poorer，in sickness and health. And forsaking all others，be faithful only to her. So long as you both shall live？（平次，汝は和葉を妻とし，共に生き，より悪き時もより良き時も，富める時も貧しい時も，病める時も健やかなる時も，彼女を愛し，

慰め，敬意を払い，彼女を生涯の妻とし，そして，二人が生きている限り，汝は彼女への信
義を貫くために，他の全てを犠牲にすることを誓いますか？）」
「Ｉ　ｗｉｌｌ（誓います）」
「Ｋａｚｕｈａ，　ｄｏ　ｙｏｕ　ｔａｋｅ　Ｈｅｉｊｉ　ｔｏ
ｂｅ　ｙｏｕｒ　ｗｅｄｄｅｄ　ｈｕｓｂａｎｄ　ｔｏ　ｌｉｖｅ
　ｔｏｇｅｔｈｅｒ　ｉｎ　ｍａｒｒｉａｇｅ
Ｄｏ　ｙｏｕ　ｐｒｏｍｉｓｅ　ｔｏ　ｌｏｖｅ　ｈｉｍ，　ｃｏ
ｍｆｏｒｔ　ｈｉｍ，　ｈｏｎｏｒ　ａｎｄ　ｋｅｅｐ　ｈｉｍ？
　Ｆｏｒ　ｂｅｔｔｅｒ　ｏｒ　ｗｏｒｓｅ，
ｆｏｒ　ｒｉｃｈｅｒ　ｏｒ　ｐｏｏｒｅｒ，　ｉｎ　ｓｉｃｋｎ
ｅｓｓ　ａｎｄ　ｈｅａｌｔｈ．　Ａｎｄ　ｆｏｒｓａｋｉｎｇ
ａｌｌ　ｏｔｈｅｒｓ，　ｂｅ　ｆａｉｔｈｆｕｌ
ｏｎｌｙ　ｔｏ　ｈｉｍ．　Ｓｏ　ｌｏｎｇ　ａｓ　ｙｏｕ　ｂｏ
ｔｈ　ｓｈａｌｌ　ｌｉｖｅ？　（和葉，汝は平次を夫とし，共に生き，よ
り悪き時もより良き時も，富める時も貧しい時も，病める時も健や
かなる時も，彼を愛し，
慰め，敬意を払い，彼を生涯の夫とし，そして，二人が生きている
限り，汝は彼への信義を
貫くために，他の全てを犠牲にすることを誓いますか？）」
「Ｉ　ｗｉｌｌ（誓います）」
「それでは，誓いの言葉を……」
　牧師の宣言の後に沈黙が支配した。
「Ｉ，　Ｈｅｉｊｉ，　ｔａｋｅ　ｔｈｅｅ，　Ｋａｚｕｈａ，
ｆｏｒ　ｍｙ　ｗｉｆｅ．　Ｉ　ｗｉｌｌ　ｋｅｅｐ　ｔｈｉｓ
ｐｒｏｍｉｓｅ　ｆｏｒｅｖｅｒ
（私，平次は，汝，和葉を，私の妻とします。私はこの約束を永遠
に貫き通します）」
「Ｉ，　Ｋａｚｕｈａ，　ｔａｋｅ　ｔｈｅｅ，　Ｈｅｉｊｉ，

ｆｏｒ　ｍｙ　ｈｕｓｂａｎｄ．　Ｉ　ｗｉｌｌ　ｋｅｅｐ　ｔｈｉｓ　ｐｒｏｍｉｓｅ　ｆｏｒｅｖｅｒ
（私，和葉は，汝，平次を，私の夫とします。私はこの約束を永遠に貫き通します）」
「指輪の交換を……」
牧師の宣言に続き，指輪の交換が始まった。
「指輪の誓いの言葉を……」
「Ｗｉｔｈ　ｔｈｉｓ　ｒｉｎｇ，　Ｉ　ｔａｋｅ　ｔｈｅｅ　ｆｏｒ　ｍｙ　ｗｉｆｅ（この指輪をもって，私は汝を妻とします）」
平次は和葉の左薬指に結婚指輪をはめた。
「Ｗｉｔｈ　ｔｈｉｓ　ｒｉｎｇ，　Ｉ　ｔａｋｅ　ｔｈｅｅ　ｆｏｒ　ｍｙ　ｈｕｓｂａｎｄ（この指輪をもって，私は汝を夫とします）」
和葉は平次の左薬指に結婚指輪をはめた。
その後のイベントも滞りなく続き，誓いのキスをする時となった。
「Ｙｏｕ　ｍａｙ　ｋｉｓｓ　ｔｈｅ　ｂｒｉｄｅ（誓いのキスを……）」
平次は和葉のヴェールをめくった。
「……」
二人の間に沈黙が落ちた。本来なら，ここで平次が和葉にキスするのだが，しようとしない。和葉も頬を染めたまま動かない。
そんな沈黙が支配する中，指笛の嵐が起きた。見かねた外野が煮え切らない二人に発破をかけるために，口笛を吹き鳴らした。それも，一人や二人ではなかった。
「神聖な場です。静粛に願います」
牧師は粛々と注意した。しかし，澄ました表情からは失笑が漏れてさえいた。
「服部ー！　往生際が悪ぃぞー！」

外野からアジる声が発せられた。
「そうだ，そうだ！　いつも，見せつけてるくせに，こういう時だけ，猫被ったってしょうがねーぞー！」
「ここまでして，お嫁にいけないなんてゆうたら，和葉が暴れるわよー！」
男女混声のアジテーションが教会内に響き渡った。指笛も飛び交っていた。
「何か，大変なことになっちゃったわね」
外野の中にいた蘭が，小声で隣に座っていた新一に話しかけた。
「確かにな。でも，こんぐらい賑やかな方があいつらしいかもな」
新一は苦笑しながら言った。
「そうかもね」
この結婚式は親しい友人だけが出席していた。親は出席していない。事の発端は，二人の友人達が手作りの結婚式にしようと言ったことだった。牧師も，友人の中の一人だった。
会場の教会も彼の家だった。だからこそ，指笛やアジテーションが横行してもそれほどの騒ぎになっていなかった。むしろ，賑やかしの一環となってさえいた。
「……」
平次は一呼吸置いて，覚悟を決めた。和葉の唇に誓いのキスを落とした。　その瞬間，
拍手喝采が起こり，指笛やアジテーションも最高潮に達した。
「Ｔｈｉｓ　ｍａｒｒｉａｇｅ　ｗａｓ　ａｐｐｒｏｖｅｄ　ｂｙ　Ｈｉｍ，　ａｍｅｎ（この結婚は主によって承認されました。アーメン）」
二人は教会の中央を腕を組んで退場した。その際も，拍手喝采や指笛は止むことはなか

った。口々に二人を祝う言葉が投げかけられた。形式破りの結婚式だったが，二人を祝う気持ちだけは本物だった。

Tat 3 Schwangerschaft und Heirat（後書き）

意味：「妊娠と結婚」
読み：タット・ドライ。シュヴァンゲシャフト・ウント・ハイラート

今回は３００行以上を目安にしたので長くなりました（３３８行）。最初の原稿とはかなり変わっています。さすがに，少々表現が過激かなと思いましたので。実際はここまでが前置きといったところです。本当の話はこの後から始まる予定です。
ちなみに，途中の英語の訳はかなり大雑把な意訳です。あしからず。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0108a/

Honig Kalzit

2010年10月28日08時47分発行